

第43回若手研究者・院生情報交換会 報告

龍谷大学 樽井康彦

テーマ：実践的社会福祉調査論 ―経験から学んだリサーチ・リテラシーの共有―

日時：2018年12月22日（土）14:00～17:00

場所：同志社大学今出川キャンパス 良心館 RY408教室

参加者：17名

今回の若手研究者・院生情報交換会は、実践的な調査研究論として企画しました。昨今、統計解析ソフトの普及もあり、調査・分析方法の選択肢が大きく広がったことは歓迎すべきですが、最も重要なのはそれらをどう使いこなすかであり、どれだけ便利な道具はあっても、研究の問いそのものは試行錯誤の中で模索していくしかないと考えています。その過程で参考になるのが、実際に調査を行った他の研究者の経験に耳を傾けることだと思います。今回の企画では、社会福祉の研究者2名をパネリストとしてお招きしました。お二人とも量的・質的の調査と論文執筆の経験が豊富であり、また、今回は特に自らの失敗談も含めて実践的な話を、というコーディネーターのリクエストに応じて、非常に実践的な話をしていただきました。言いにくいであろう過去の失敗談も含めて、大変有益な実践経験を語ってくれました。

まず、神戸女学院大学の與那嶺先生からは、研究テーマの設定において、論文の査読者から大きな示唆を得た経験を話していただきました。過去に投稿した際、査読者から厳しい指摘を受けたが、それによって執筆時点では気づいていなかったテーマの核心に気づけたこと。そして、その後の研究においても分析方法など常に査読者からの指摘を通して学んできた経験を話してくれました。つまり積極的に研究成果を世に問うことを通して、さらに視野が広がることを豊富な実例で示していただきました。また、與那嶺先生自身が査読者、つまり査読する側としての経験もお持ちであり、論文を投稿する際のポイントについて査読者の視点から具体的に助言してくださいました。若手院生の方にとっては、多くの示唆が得られたことと思います。何よりもユーモアを交えた語り口を通して、苦勞の多い研究の道のりを、楽しむ姿が伝わってきました。

つづいて武庫川女子大学の増田先生は、研究のプロセスにおいて問題意識を「発酵」させる時期の重要性について教えていただきました。研究計画を具体的に練っていく作業を軽視するとあとで調査に支障が出る場合もあること、変数は調査の後から補うことができないため、入念な準備が非常に重要であることなどを、豊富な具体例を交えて解説してくださいました。つまり、仮説モデルを真摯に構築するという原点の大切さを、強調されていました。また、高度な分析方法が必ずしも高く評価されるわけではなく、あくまで研究仮説に合った方法であることが大事であること、調査結果の考察においても「データを最後まで味わう」ことなど、改めて調査研究の原点に気づかされる内容ばかりでした。

後半は、参加者から分析方法等から研究への動機づけに至るまで質疑応答とクロストークを通して活発な意見交換がなされました。最後にアンケートを取りましたのでその結果を掲載します。末筆となりましたが、素晴らしい会場を貸していただいた同志社大学に感謝申し上げます。

<終了後のアンケート結果より> (回収数：11通)

1. 今回の企画に参加した理由をお答えください。

(以下抜粋) 査読付き投稿論文を考えていた。こういった交流の場は大切、講師や参加者の人の意見が聞きたい。調査研究の方法に興味があった。実際に調査を行った先生の体験談を聞きたかった。テーマが興味深かった。社会福祉調査の方法を学びたい。社会福祉調査が苦手だが研究職としての責任を果たすため。

2. 本日の内容はあなたの研究に役に立ちましたか？ (5段階評価、5が最高)

「5」…9名、「4」…2名

3. 本日の内容について評価してください (5段階評価、5が最高)。

1) 研究テーマ : 「5」…10名、「4」…1名

2) 講義内容 : 「5」…10名、「4」…1名

3) 質疑応答 : 「5」…9名、「4」…1名、「無回答」…1名

4. 自由記述より

- ・少人数なので丸型の椅子配置でもよかった。スクール形式だと意見の「クロス」が難しい。
- ・最近受講した研修の中で一番勉強になった。
- ・テーマ設定において文献レビューや目的を明確にし、じっくりテーマに向き合うことが大切だと改めて気づいた。調査実施までに主観ではなく他者の見解等客観的に検討する重要性を学んだ。論文執筆において結果と考察を対応させることが重要だが考察を記述するポイントも教わり多くの気づきと学びがあった。
- ・アクセスが良く、参加費無料もよかった。講師が大阪市大院出身者ばかりだったので他大学院出身者も混ぜてほしかった。質的研究をされた方からも話をききたかった。経験・体験談を聞くことができ非常に有意義であった。
- ・量的調査が中心だったが学ぶ点が多く参考になった。今後研究デザインを含め考えていくこと学ぶことが多かった。

アンケートにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

